論　文

市民マラソンの現状と課題について

~高知龍馬マラソンを事例として~

The current state and problem of the citizen marathon.
-As a case of Kochi Ryoma marathon-

宮本　隆信（高知大学教育学部）

MIYAMOTO Takanobu

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

About the citizen marathon as a result of analyzing the circumstances of the citizen marathon and the current situation such as operation, with the case of "Kochi Ryoma marathon" as an Example, the purpose was to clarify the problem, the following was clarified.

1) The citizen marathon has been on an increasing trend since the 2007 Tokyo marathon, and a citizen marathon is held throughout the country. Especially in November and February there are concentrations.
2) The "Kochi Ryoma Marathon" started in 2013 has been steadily extending participants. Especially the rate of increase of women is remarkable.
3) By region of participants, Kochi prefecture has half of them, contributing to the promotion of sports in the prefecture, and the activation of sports tourism by the participants outside the prefecture.
4) The Kochi Ryoma marathon is a participant evaluation, has been continuously highly evaluated, it can be said that the meeting is highly satisfactory.
5) Regarding the event management, we have achieved a surplus since the first year of holding, and we are able to manage tournaments in line with ourselves.
6) As a task to develop the Kochi Ryoma marathon, we will develop by mutual relations between "do" (runner) and "sasae" (management side), and "Miru" (supporters).

Ⅰ．問題の所在

ジョギング・ランニング人口が 1000 万人（2014 笹川スポーツ財団）を超え、余暇活動に行うスポーツ活動としては、最も人気のあるものとなっている。その理由として、用具に要する費用が少ないこと、場所を選ばずに一人で楽しめる手軽さ、高齢社会が加速する中での健康志向の高まり、女性ランナーを中心としたウェアのファッション化などが挙げられている（2011 関東財務局）。またランニング人口の増加にあわせて、マラソンの大会数や大会へ参加人数も大きく増加し、2015 年には、フルマラソンだけで約 200 の大会が開催され、日本陸上競技連盟公認コースで開催された大会に限っても 75（2014 アールビーズ、日本陸連）、そのうち参加者が 10,000 人を超える大会は 26 に上っている。特に 2007 年に始まった東京マラソン以降に全国各地で同様のマラソン大会の開催が相次ぎ、新規開催となった大会は 30 を超えている。これらの新規のマラソン大会は、岩谷ら（2012）によると競技性の低い行政型と大規模型に分類され、経済波及効果や地域振興に買っており、女性の参加率が高く、都市型で観光や健康、地域志向の要素が融合された大会であるとしている。また北村ら（1997）は、このような地域スポーツイベントが地域活性化へ一定の効果があると報告している。

また一方で、既存の大会や新規の大会において、参加者数の伸び悩み、大会運営の未熟さ、予算、参加者数減などから大会の取りやめや大会の縮小などの問題も起きてきている。

そこで本研究では、このように拡大傾向にある市民マラソンについて「高知龍馬マラソン」を事例として、市民マラソン拡大化の経緯と運営等の現状を分析し、課題を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 市民マラソンの現状分析
2. 高知龍馬マラソンの大会概要の整理
3. 高知龍馬マラソンの大会運営についての整理
4. 高知龍馬マラソン参加者推移の整理
5. 高知龍馬マラソン参加者評価の整理

以上について、高知龍馬マラソン実行委員会企画運営委員会資料などから整理する。

Ⅲ．結果と考察

1. 市民マラソンの拡大

42.195km を走るフルマラソンは、日本においては、1940 年代から開催されてきており、現在は 108 大会、日本陸上競技連盟公認コースを使用したフルマラソンでは 72 大会が開催されている。開催地域をみても 37 都道府県にわたり全国的に開催されている。日本陸上競技連盟公認マラソンコースを使用しての大会開始年を年代別にみていくと、図 1 から 1970 年代までは、大会自体が一桁で推移しているが、1980 年代に一気に 20 を超える大会が開催されるようになった。その後 10 年ごとに 10 前後ずつ増加し、2007 年から開催されている東京マラソンの以降では、42 の大会が新設されており、現在は第二次マラソンブームといえる。

東京マラソンは、現在、国際ロードレース・マラソン協会公認（AIMS）のゴールドラベルの承認を受けている大会であり、エリートランナーと市民ランナーあわせて 3 万 5 千人が一緒に走る日本最大の市民マラソンとして、地方の市民マラソンのシンボル的な大会となっている。

また、2014 年度のフルマラソンの開催月別大会数（図 2）では、10 月、11 月と 2 月、3 月に集中しており、この月には、全国のどこからフルマラソンが開催され、同日に複数の大会が重複して開催されている。

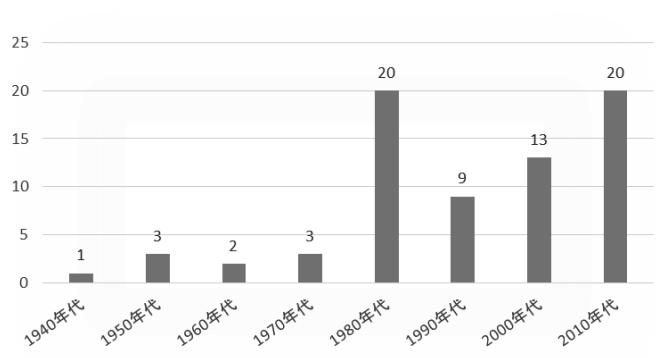

図1 全国の公認フルマラソンの開催開始年

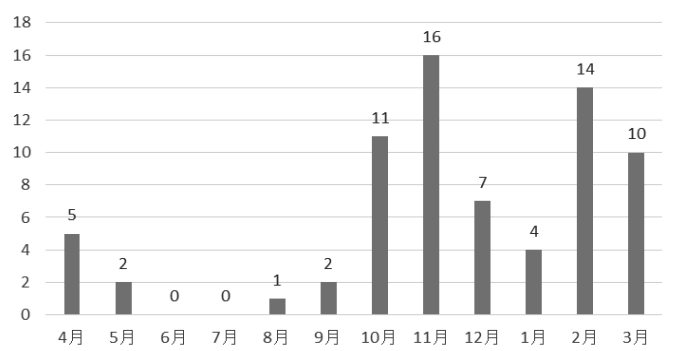

図2 2014年度フルマラソン開催月別大会数（アールビーズ2014）

2. 高知龍馬マラソンの概要

高知龍馬マラソンは、高知県で 2013 年から始まった 42.195km の市民フルマラソンである。

2012 年 2 月 15 日付高知新聞において、それまで行われていた「高知マラソン」を次年度から「高知龍馬マラソン」として 3000 人規模の市民マラソンへの衣替えが発表された。

【大会開催方針】
「全国各地から多数のランナーを迎え、マラソンの底辺拡大と競技力の向上、県民スポーツ意識の高揚と健康への関心を高め、日本一の健康長寿県づくりに繋げる。また観光の振興、参加者、応援者とスタッフ、ボランティアとの交流を深め、高知県の魅力を大いに発信し地域の活性化に寄与得ることを目的として開催する。」
【大会コンセプト】
1) 日本一の長寿県づくりと地域の活性化
2)「する・みる・支えるスポーツ」に親しむ機会の提供
3) スポーツツーリズムの推進
4) 日本一の温かいおもてなし
【キャッチフレーズ】
「わざわざ高知で走ろう！高知龍馬マラソン」
【制限時間】
6 時間
【大会参加費】
8000 円
【コース】
日本陸上競技連盟公認コース
高知県庁前をスタート、はりまや橋、南国バイパス、浦戸大橋、桂浜花街道、仁淀川河口大橋、春野総合運動公園をゴールとする 42.195km
【大会の特徴】
前日イベント：よさこい鳴子踊りによるおもてなしや
大会の魅力：ボランティアや沿道の応援による人
給食では高知の郷土食を中心
太平洋をのぞむ自然豊かなコース
フィニッシュ会場：おもてなし広場でのおもてなし
ひろめ市場での交流会

3. 大会参加者数

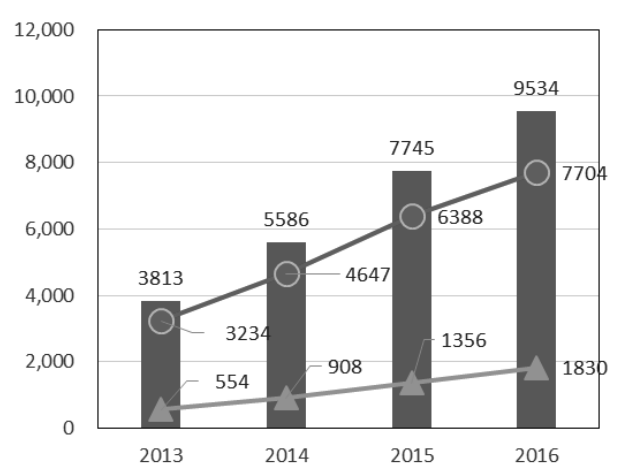

図3 高知龍馬マラソン エントリー数推移

2013 年の開催は、3813 人であったが、大会開催ごとに 5000 人、7000 人、9500 人と徐々にエントリー数を増やし、2106 年の大会では、2013 年の参加者の 2.5 倍となっている。また 2013 年と 2016 年の性別参加者をみると、男性は、3234 名から 7704 名へ 2.38 倍、女性は、554 名から 1830 名と 3.3 倍となっており、男性よりも女性の増加率のほうが高くなっている。

女性の参加割合について、2013 年は、全体比率で 14.5%だったのが 2016 年には 19.2%まで上昇しており、女性の参加者が増加してきている。

年齢別の参加者の推移では、2013 年から 2016 年まで通して、40 代が最も多く、ついで 30 代、50 代、20 代、60 代の順である。市民マラソンに参加するのは、主に 30 代、40 代が中心となっていることが分かる。また参加者の年代別増加率をみると、20 代参加者の増加率が最も多く、2013 年から 2016 年比較では、373%増加している。次に増加率の多い年代は、30 代(248%)、40 代(234%)、50 代(229%)、60 代においても 199%であり、各年代通して増加している。性別にみてみると、女性の増加率が男性の増加率に比して高く、特に 20 代女性は、448%、30 代～50 代女性は平均して 300%を超える増加率である。

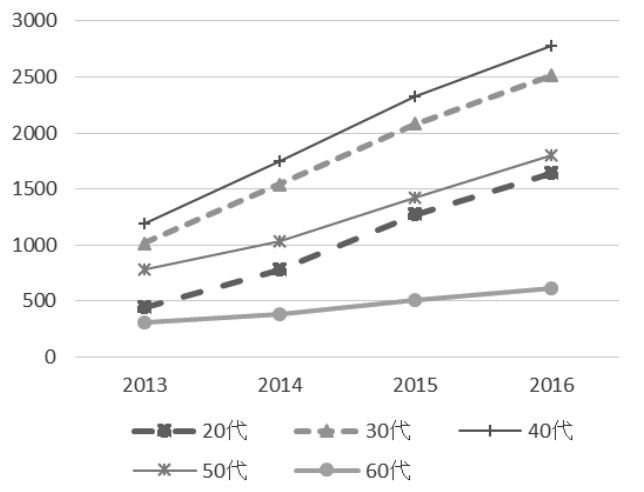

図4 年齢別参加者の推移（2013-2016）

参加者内訳では、陸上競技連盟に登録している登録者の推移としては、2013 年は 365 名（うち女性 33 名）、2014 年 292 名（女性 33 名）、2015 年 350 名（37 名）、2016 年 466 名（65 名）と横ばい状態であり、一般ランナーの増加が著しい。

参加者の地域別推移（表 1）から、はじめから高知県内の参加者が最も多い。ついで、近隣である高知県以外の四国 3 県である。各県の内訳では、愛媛県からの参加者が多い。ついで、大阪府、東京都、兵庫県、香川県からの参加者の順となっている。高知県内の占有率は、2013 年には 37.4%だったが、年々増加して、2016 年には 48.2%にまで

達しており、県内外の割合が半々となってきている。しかし、中国、九州地方からの参加者は、少しずつ増加してきているが、全体の中では少ない。

表1　参加者の地域別推移（2013年-2016年）

（人）

	2013年	2014年	2015年	2016年
北海道･東北	42	36	57	55
関東	302	379	513	711
北信越	23	24	22	29
東海	92	83	131	149
近畿	443	520	698	869
中国	172	253	377	447
四国3県	1074	1581	1779	1948
高知	1425	2378	3672	4595
九州	66	61	83	102
海外				34
総計	3639	5315	7332	8905

表2　高知龍馬マラソンの参加者リピート率

（%）

年	13-14	13-15	13-16	14-15	14-16	15-16
全体	41.4	31.4	24.5	51.4	34.9	49.0
県内	70.0	61.4	51.5	76.0	59.1	68.1
県外	24.5	13.6	8.4	33.1	17.0	31.8

龍馬マラソン参加者のリピート率について、年度ごとに整理をしたのが表２である。2013 年に参加したランナーを軸にした場合、全体では、14、15、16 年とリピートの割合が徐々に少なくなっている。特に県外の参加者のリピート率の低下が大きい。2014 年に参加したランナーを軸とした場合も同様で全体では、徐々にリピートの割合が低下している。2015 年を軸にした場合は、全体で 49.1%、県内でも 68.1%、県外でも 31.8%と高いリピート率となっている。

4.　大会参加者の評価

ランニング専門誌「ランナーズ」を発行するアールビーズ社の運営サイト「RUNNET」(https://runnet.jp/)では、のマラソンの大会レポート&評価というコーナーがあり、大会に参加者したランナーが、自分の出場した大会について、レポートや評価を行うことができる。高知龍馬マラソンにおいても、大会開始時から出場したランナーが大会レポートならびに大会への評価を行っており、その評価を整理したのが表３である。評価項目は大きなカテゴリーとしてはインフォメーション、会場、コース、記録の４つあり、それぞれに最大で☆印を５つつけていくというものである。それぞれのカテゴリー内の項目は、年度によって多少異なっているものの大きな変更ではないため、星の数をそのまま５点法として換算した。

表3　高知龍馬マラソン参加者評価

（5点満点）

項目	2013	2014	2015	2016
インフォメーション	4.0	4.0	4.6	4.5
会場	3.9	4.1	4.4	3.8
コース・スタートエリア	4.2	4.3	4.6	4.4
記録	3.8	4.2	4.5	4.3
総評（100点）	82.5	88.4	95.1	88.4
評価者人数	132人	136人	146人	146人

（runnetより筆者作成）

インフォメーションでは、2013 年の開始は 4.0 であったのが、徐々に評価は高くなり、2016 年では 4.5 まで高くなっている。会場は、3.9 から徐々に高くなったが、2016 年では、3.9 と開始以来最も低い評価となっている。この原因として各項目を詳細にみると、トイレ、移動経路についての評価が低くなっている。参加人数の増加により、会場での情報案内、トイレなどの対策が必要となっている。コースやスタート・ゴールについては、4.2 から同水準で推移している。特に応援では、開始以来 4.5 以上の評価がでており、沿道の応援については、参加者は非常に満足していることが分かる。記録・表彰については、年代別表彰や記録証・参加賞についての評価が高くなっている。高知龍馬マラソンでは、ゴール後、直ちにコンピュータで記録証が印刷されるため時間をおかずに受け取ることができることが評価の高い一因でもあると考えられる。

全体評価（１００点）としては、開始年は 82.5 点であったが、それ以降 88.4 点、95.1 点、88.4 点と 90 点近くの評価を得ており、参加者による評価の高い大会の一つということがいえる。このことを裏付けるように、月刊「ランナーズ」の参加ランナーによる投票による全国ランニング大会 100 選に大会開始以来継続して選出されている。

5.　大会経費

高知龍馬マラソン実行委員会の資料から大会にかかる経費に関して整理をしていく。

大会予算は、2013 年の開始時は 8,400 万円だったが、回を重ねるごとに増加し、2016 年では、13,500 万円までになっている。内訳は、自治体からの補助金は高知県 2,000 万円、高知市 1,000 万円の合計 3,000 万円。他には、参加費、分担金、協賛金によるものが収入である。補助金、3,000 万円。分担金 350 万円は 2013 年から変化していない。参加料は、参加者の増大にあわせて、3,000 万円から 7,300 万円と増大している。協賛金は、2013 年は 2,000 万円だったのが、2016 年には、2,700 万円と増加している。

支出については、報償費、旅費、賃金、需用費、役務費、委託料、使用量及び賃借料、公課費などが計上されている。収入、支出の関係では龍馬マラソン開始時から 217 万円、14 万円、220 万円と継続して利益を出し、黒字で大会運営が行われている。

6.　大会の成果

2016 高知龍馬マラソン実行委員会資料から市民マラソン開催の成果について整理していく。

2016 年の大会として、1）2016 年度に開始以来、初めてすべての都道府県からのエントリー、海外からのエントリーもあり過去最高のエントリーであった。2）「沿道の途切れることのない暖かい応援」や「ボランティアの方々の心からのおもてない」は、今大会も健在でランナーから大変好評であり、早春のイベントとして定着しつつある。3）雨天時対策、救護体制、トイレの設置、給水などの課題が見つかった。などが総括として報告されている。

また成果･課題として、スポーツの振興の面において、沿道やフィニッシュ会場で大会を楽しむランナーのほか、協賛（１３社）やボランティア（2532 人）、おもてなし（物品提供 26 社 34 品、応援の店 87 店舗、おもてなし広場 26 団体）など大会を支える方が増え、県内の多くの方がランナーとしてだけでなく、様々なスタイルで大会に参画しており、県民のスポーツに対する興味・関心の高まり二つなっている。

県外からの参加者の増加は、県民とのスポーツ交流が増え、スポーツツーリズムの活性化につながっている。とも報告している。宿泊については、74%が前日に受付をしていた。龍馬パスポートの新規申請･転印者は約 900 名で多くの人が龍馬パスポーツを利用していた。

給水・給食については、トマトやミレービスケット、かつお飯など高知龍馬マラソンならではのものがランナーに好評であった。

7.　高知龍馬マラソンの発展のための課題

高知龍馬マラソンをより発展させるための課題について考えてみたい。スポーツである市民マラソンは、する（ランナー）、支える（運営）、観る（応援）の 3 つの要素で構成されているといわれている。市民マラソンは、これら 3 つの要素が相互に関連した地域総参加型スポーツイベントであるといえ、それぞれの視点からその現状の問題点を高知龍馬マラソンに照らして具体的に列記する。

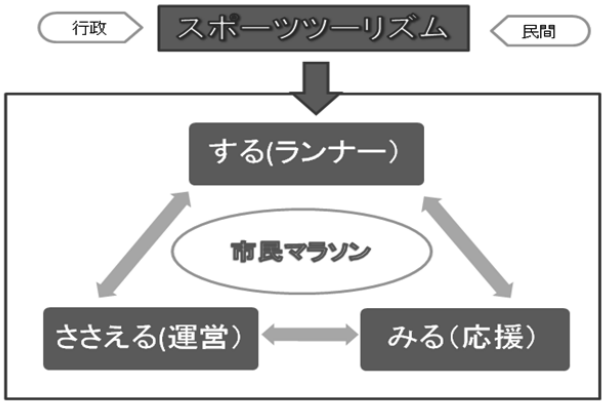

図 5　市民マラソン推進の構造（Kariya ら 2015）

1)　市民マラソンの推進の構造

①　スポーツツーリズム

国土交通省により全国にスポーツツーリズム推進の基本方針が出された（2011）。各地方ではそれを受け、スポーツイベントと観光を結び付ける企画が多く出されるようになってきた。

各地の大会開催の趣旨は「スポーツや健康への関心を高め、生涯スポーツのより一層の普及・振興および観光戦略としてのスポーツツーリズムの推進に寄与する」としており、市民の健康づくりとスポーツツーリズムによる「する」スポーツと観光による地域の活性化を推進することとなった。このことが市民マラソンのイベント化に追い風となっている。

高知龍馬マラソンにおいては、前日受付時イベント、ゴール会場でのイベント、ゴール後の交流会など多くのイベントが実施され、県外参加者との交流がはかられるようになっており、地域振興、観光に寄与している。また、県内参加者が 37%から 48%へ増加し、県民にとっての健康づくりにも寄与している。

②　「する」、「ささえる」、「みる」の相互関係

大会の主催は、行政（県）と民間（陸上競技協会・協賛会社）が連携して協働で開催しており、「する」ランナーを、審判、ボランティアの運営スタッフが「ささえ」て、ランナーを「みて」応援する地域住民が大会を盛り上げるという相互関係がみえてくる。

高知龍馬マラソンでのこれらの関係は、大会を重ねるごとに「走る」、「運営」、「応援」する立場が相互に流動的に移行しており、早春の大きな県民イベント化として定着しつつある。

2)する（ランナー）

①エリート、一般ランナーの共存

市民マラソンでは、競技登録のエリートランナーと一般ランナーが一緒に走る大会が多い。目標となる選手（ゲスト選手）と一緒に走ることの喜びや楽しさを共有できることからこの形式が日本では多く取り入れられている。高知龍馬マラソンでも同様であり複数のゲストランナーが一般ランナーと走っている。課題としては制限時間が長くなることによる交通規制や、ランナーの救護体制、またトイレな万全の体制を整える必要がでてくる。

③　準備不足による、事故、怪我の多発。

市民マラソンがイベント化されることにより、マラソン初心者が急増し、緊急搬送されるケースも増加している。参加者には、少なくとも数か月の準備をし、ランニングの基礎的な知識をレクチャーするなどの対策が必要となってくる。

④　危険を伴う仮装ランナーへの規制とマナーの向上。

市民マラソンでは、男女問わず、ファショナブルなウェアが大会を盛り上げている。一方で仮装したランナーも急増している。ランニングに支障のない軽装のものから走るのに適していない仮装まで多様であり、転倒の危険や周りのランナーや応援者に不快な思いをさせないためのランナーのマナー向上や仮装のガイドラインが必要となってくる。

3)ささえる（運営）

①大会のスムーズな進行

市民マラソンを支えるのは､大会運営のスタッフになる。大会運営スタッフは、競技運営の陸上競技審判とランナーの受付、給水・給食、救護、コース沿道の警備などのボランティアスタッフに分類される。給水・給食は5ｋｍ毎に地域特産のジュースや果物、野菜などが配置され、多くのボランティアスタッフが必要となる。スポーツツーリズムが先行しすぎると、不適切な特産物の提供や衛生管理が行き届かない場合も見られるため注意が必要となってくる。

②健康管理体制

市民マラソンでは、約10%のランナーが体調を悪くするというデータがあり、急激な体調不良に対応するために、救護所、AED、メディカルランナー、ランニングサポーターなど設置が規則で定められ、これらのスタッフも大量に必要となってくる。

③危機管理

ボストンマラソンでのテロ事件にみられる、安全対策。また、交通規制のかかる公道での警備。日本ならではの地震の緊急避難の対策等。大会の規模拡大に伴いそのリスクは増大しており、大会運営側は、これらの危機管理体制を十分整えた大会運営が必要となってくる。

⑤　情報管理の管理

エントリー方法の先着、抽選などにより、走れないランナー、複数エントリーすることにより出走権利の転売や放棄などの問題もおきている。ランナーの情報の管理や、バラバラなエントリーシステム、募集時期や大会開催日の重複など、全国的規模での大会の淘汰が始まっており、これらに対する対策も必要となってくる。

4)みる（応援）

①ルールとの抵触

沿道での応援がランナーを力づけ、大会の盛り上げには欠かせないものとなっている。沿道での応援には、吹奏楽による応援や自作の看板、横断幕などでランナーを励ましたりしている姿が多く見られる。

また応援者は、市民ランナーとハイタッチをして、マラソンを一緒に楽しむ姿もよくみられるが、エリートランナーのハイタッチはルール上支援とみなされルールに抵触する場合があり、注意が必要である。応援する側もマナーを身に着け盛り上げてほしい。

②交通規制に伴う応援のマナー

応援者の手作りの菓子などをランナーに配り、ランナーを応援するケースも多く見られる。しかし市民マラソンは、都市の中心道路、名所などに交通規制をかけて行われるため、沿道住民の生活に支障をきたす恐れもある。大会主催者は、沿道住民に理解を求めながら協力体制をとっていくことも課題となる。

Ⅳ　結論

拡大傾向にある市民マラソンについて「高知龍馬マラソン」を事例として、市民マラソン拡大化の経緯と運営等の現状を分析し、課題を明らかにすることを目的とした結果、次のことが明らかになった。

1)　市民マラソンは、2007年の東京マラソン開催以来、増加傾向にあり、全国で市民マラソンが開催されている。特に11月、2月に開催が集中している。
2)　2013年から始まった「高知龍馬マラソン」は、参加者を順調に伸ばしている。特に女性の増加率が著しい。
3)　参加者の地域別では、高知県内が半数をしめており、県内のスポーツ振興への寄与、県外参加者によるスポーツツーリズムの活性化に結びついている。
4)　高知龍馬マラソンは参加者評価で、継続して高い評価を受けており、満足度の高い大会といえる。
5)　大会運営についても、開催初年から黒字を達成しており、身の丈にあった大会運営を行えている。
6)　高知龍馬マラソンを発展させていくための課題として、「する」（ランナー）と「ささえる」（運営側）、そして「みる」（応援者）の相互関係によって発展していく。

文献

1）笹川スポーツ財団（2012）笹川スポーツ財団の全国調査「スポーツライフに関する調査 2012」調べ,http://www.ssf.or.jp/press/pdf/121005_press_release.pdf(20150430閲覧)

2）日本生産本部(2103)『レジャー白書2013―やめる理由・始める理由　余暇の道筋―』産性出版

3）スポーツツーリズム推進連絡会議（2011）スポーツツーリズム推進基本方針～ スポーツで旅を楽しむ国・ニッポン～, http://www.mlit.go.jp/common/000160526.pdf

4）アールビーズ（2014）全国ランニング大会ガイド2014年7月～2015年6月,月刊ランナーズ2014年8月号別冊付録

5)　高知龍馬マラソン実行委員会事務局（2015）高知龍馬

マラソン 2015 競技運営マニュアル
6) 公益財団法人日本陸協競技連盟(2013) 市民マラソン・ロードレース運営ガイドライン, http://www.jaaf.or.jp/rikuren/pdf/road.pdf
7) 関東財務局経済調査課（2011）“走り”が生み出す経済効果：マラソンブームと市民マラソン大会-埼玉県内の例-,経済レポート
8) 岩谷雄介ら（2012）国内市民マラソンの類型化別発展策に関する研究,スポーツ産業学研究,22-1,pp63-70
9）北村尚浩ら(1997) スポーツイベントによる地域活性化：開催地住民の評価に着目して,鹿屋体育大学学術研究紀要,17,pp47-55
10）アールビーズ（2014）ランニングデータ 2014
11）高知龍馬マラソン実行委員会(2013)平成 25 年度総会資料
12）高知龍馬マラソン実行委員会（2014）平成 26 年度総会資料
13）高知龍馬マラソン実行委員会（2015）平成 27 年度第 2 回総会資料
14）高知龍馬マラソン実行委員会（2016）平成 28 年度第 1 回総会資料
15）高知新聞朝刊（2012.2.15 付）「高知マラソン創設」
16) RUNNET「高知龍馬マラソン 2013 レポート&評価」, https://runnet.jp/report/race.do?raceId=76449
17) RUNNET「高知龍馬マラソン 2014 レポート&評価」, https://runnet.jp/report/race.do?raceId=87396
18) RUNNET「高知龍馬マラソン 2015 レポート&評価」, https://runnet.jp/report/race.do?raceId=98452
19) RUNNET「高知龍馬マラソン 2016 レポート&評価」 https://runnet.jp/report/race.do?RaceId=109576
20）渡邊健（2011）市民マラソン大会における他者行動と大会満足度の関係に関する研究,早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文
21）KARIYA ら(2015) AN ANALYSIS OF A CITIZEN'S MARATHON AS A RECREATIONAL ACTIVITY, 2015World Recreation Educational Association (WREA), Chengde Municipality, Capital University of Physical Education and Sports of China